小池辰雄著作集　第２巻『芸術のたましい』

ファウスト（第一部）

# 【目次】

ゲーテ＝ファウストの宗教性

# ゲーテ＝ファウストの宗教性

主人公ファウストはキリストの復活の歌によって、危く毒杯の死をまぬがれた。かくて迎えた復活祭の晨、戸外をし、大自然の春のよみがえりの相をで、一日の散策の果てに夕陽を浴びた景観に永遠を想うが、おのが胸の中なる二つの魂の矛盾に嘆く。再び書斎にもどり、夜更けて冥想する。彼はその独白の中でかくいう。

［独文省略］

「人間愛が動いている、

神への愛も今や動き出した。」（1184～1185）（私訳）

シュレーエルの註は、ここで直ちにかのスピノザの

［独文省略］

「神を本当に愛する者は、神が彼を愛し返してくださるのを求めてはいけない」

の意味を考察にとり入れているが、そこまで考えなくてもいいだろう。むしろ「神への愛」は「神からの愛」即ち本願の爰によってもたらされるものである。しかしそれそここでは考えなくていいだろう。ゲーテ＝ファウストのこの場合の宗教的雰囲気は、キリストの復活祭に起縁しているものである。そして彼の散歩に於て彼の魂をとらえたものは「夕陽」（Abendsonne）を中心としたえの美であった。

「諸々の天は神の栄光を顕わし、

はそののわざを示す。

この日ことばをかの日につたえ、

この夜知識をかの夜におくる。

語らず言わず、その声聞こえざるに、

その響きは全地にく、その言葉は地のにまで及ぶ。

神はかしこにを日のために設け給えり。

日はがのを出ずる如く、

が競い走るを悦ぶに似たり。

その出でたつや天のよりし、

そのりゆくや天の果てにいたる、

物としてそのあたたまりをらざるはなし。」（詩篇19･1～6）

旧約の有名な右の詩句の如く、神の栄光をあらわしている太陽と、その光を浴びて千態万様の美を現じている大自然とは、ゲーテの眼には、神─太陽─自然という融合に於て生き生きと直観され体感されていた。1070～1099行はその渾然たる情感の発露である。

［独文省略］「ああ、たましいの翼にはそうたやすくは

肉体の翼が伴うわけにいかない」（1090～1091）（私訳）

といって彼の魂は太陽を追う如く羽ばたく。肉体がこれに伴わないとて嘆く。併し分析的な考えを斥けるゲーテの魂は霊肉の相即をこそ根源的には願っていたものと思われる。肉体は内側から浄化されることを要する。魂の浄化と共に。そのような憧憬をその次の美しい数句が詠う。

［独文省略］「その情感が上へまた前へと推し進むのは、

だが誰しもの生まれつきのではないか、

それはがわれらの頭上たかく

さえずり歌いつつにすがたを消すとき、

そそり立つの彼方上空にが翼をひろげてするとき、また野越え海越えてが

指してあこがれ往くとき。」（1092～1099）（私訳）

高く高く蒼空に姿を没する雲雀、峰の松柏の摩天のの遙か上を遊弋する鷲、原野を越え、湖面を渡りゆく鶴の影、そのような自然の諸相は魂をの世界へ、の楽土へと誘う。はてしなく上へ、きわみなく前へと駆りたてるあるもの、かかるに彼ゲーテ＝ファウストの宗教性はその根源性をもっている。ゲーテ＝ファウストの宗教性を単に汎神論的とかたづけてしまうようなとり方は当たらない。ゲーテ＝ファウストは一神、多神、汎神のいずれに対しても自由自在な宗教性を呼吸している。即ちそのいずれにも円通するところの幅をもっている。その描く情感の円は無限である。一切の概念限定、規定をゆるさない情感によって崇敬の対象をとらえ、対象の中に投入し、対象と同化し、一体化せんとする角度がゲーテの宗教の全一的性格であるといったら可いと思われる。

私はここに三連の詩句にゲーテの魂の三相一貫の息吹を直観する。

「しかし新しい衝動が目をさました。おれは日の永遠の光を飲もうと、なおも急ぐ。

昼を前にし、夜をうしろに負い、

大空を頭上にし、波濤を脚下にして。」（1085～1088）

「すべて荒々しい振舞をさせようとする

粗暴な衝動は寝人った。

今は人間への愛が、また

神への愛が動きそめている。」（1182～1185）「理性がふたたび物を言いはじめ、

希望がふたたび咲き出でる。

人は生命の小川へとあこがれる。

ああ！　生命の源へとあこがれる。」（1198～1201）（佐藤通次訳）

即ち夕陽をうてその「永遠の光」（ewiges Licht）を飲み、これを浴びようとする光への衝動と、自己胸中の霊肉二様の衝動の中の「荒々しい衝動」（wilde Triebe）が鎮められたあとで、神と人への愛（die Menschenliebe, die Liebe Gottes）の衝動が湧き、更にそれが展開して生命の泉（nach des Lebens Bächen, nach des Lebens Quelle hin）への衝動となる。（光）、（愛）、（生）の三エルがゲーテ＝ファウストの宗教的根源衝動であると思われる。この三者が、復活の朝の散策から、日暮れて夜の書斎の冥想をうたっている詩の波の中に相応えて現われているのは、偶然ではなく、その三者間に内的な深い必然的連関があればこそである。この光と愛と生命、Licht、Liebe、Leben、は正にヨハネ福音書及びヨハネ書翰に於て特色ある三つの言葉であって、イエスがまたこの三者を深く一体的にとらえていた三相一貫の消息であった。

「之（言）に生命あり、このは人の光なりき。……諸々の人を照らすの光ありて、世にれり。……は肉体となりて我らの中に宿りたまえり。我ら、その栄光を見たり。実に父のの栄光にして（愛）と（義）とにて満てり。」（ヨハネ1･4～14）

「言」といい、「生命」といい、「光」といい、「恩恵」といわれている実体はキリストであった。

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」（ヨハネ3･16）

キリストは即ち永遠の生命そのものであり、これを与えんとするところに神の本願たる愛があるのである。ヨハネは書翰の中でいう、

「愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、凡そ愛ある者は、神より生まれ、神を知るなり。愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。神の愛われらに顕われたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我らをして彼によりて生命を得しめ給うに因る。愛というは、我ら神を愛せしに非ず、神我らを愛し、その子を遣わして我らの罪のためにめのとなし給いし是なり。……神は愛なり。愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給う。かく我らの愛、完全を得ての日にれなからしむ。我らこの世にあって主の如くなるに因る。愛には懼れなし、全き愛は懼れを除く。……」（ヨハネ第一書４･7～18）

イエスがユダヤからガリラヤヘの途上、サマリヤのスカルの町のヤコブの泉のほとりで、サマリヤの女と会話をしたときの「活ける水」のはなしは余りにも有名で、ゲーテがここで“ ”（生命の泉）というとき彼の意識は知るよしもないが、聖書のこの箇所の如きが無意識的にもその源泉であったろうと思われる。

「イエス答えていい給う、すべて此の（ヤコブの井泉の）水を飲む者は、また渇かん。然れどわが与うる水を飲む者は、永遠に渇くことなし、わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし」（ヨハネ4･13～14）

キリストは自らを「永遠の生命」として自覚し、その故に「活ける水」（同4･10）、「永遠の生命の水」（同4･14）を与えると言い、その「水」といわれる実質は「聖霊」（同7･39）のことであることを語って居る。またヨハネ伝14卓以下17章までのキリストの言の中に、いかに、「生命」「愛」「栄光」「真理」「聖霊」という相関相入の言葉が流れているかに驚くのである。

以上の如きイエスやヨハネの宗教的実相に於て、光─愛─生命の三エル、三相一貫、三者一体的表現をおのずからとっているという著しい特色があるのであるが、ゲーテ＝ファウストの宗教的性格がパウロ的な「信仰」ではなく、著しくヨハネ的性格であることは多くの例証をしなくとも言い得るところである。ただゲーテ＝ファウストがその宗教的内実に於てヨハネと同じであったというのではないが、同質ということはキリスト論的には不可であるが、同質的なものがあることは宗教的には言い得るのである。かくも光─愛─生命を愛してやまぬゲーテ＝ファウストの根源衝動は、「信仰」という事態からは遠いように思われるかも知れぬが、実はまことの「信仰」には近いというイロニーが生ずるところに興味ある問題がふくまれている。さて次に1210～1237行の重要な箇所を検討しなければならない。私はある意味でここにゲーテ＝ファウストの根本性格をつかむべき重要な鍵があるとすら思う。而もそれが聖書の啓示の事態と深く関わりを有っているのである。

［独文省略］

「しかし、ああ！　どんなにおれが願っても、満足が

もはや胸の中からかぬのを、すでにおれは感じている。

けれど、どうして流れがこうも早く涸渇し、吾々がまたも渇きに苦しむことになるのか？」（1210～1213）（佐藤通次訳）

「最善の意志にも拘らず」──「どんなにおれが願っても」──胸に満足が湧かない、という。生命の小川をあこがれ、生命の泉を慕っているにも拘らず、その様な根源衝動にも拘らず、何故にこのように生命の枯渇を覚えるのであろう。理想主義的観念哲学の時代、人間の内面性の楽観的肯定をゆるしていた時代の子として、ゲーテはたしかにそれ以上の楽観主義者、現実主義者であったが、それと同時に彼は無限の渇きを知る人間でもあった。光をどこまでも追求し、愛に飽くまでも飢え、生命を限りなく慕う魂で彼はあった。そのことは正にゲーテ＝ファウストの真相でもある。

［独文省略］（1214～1219）

この様な渇きの経験は幾度となくめた。さきにファウストは知的不満でどうにもならぬことを嘆いたが、この生命の渇きはそれよりも深刻な根本欲求である。地上のものを以てしてはこの欠如は満たされない。わが胸中にもわが環境にそこれを満たすものがない。そこで超現世的なるものを超越界に求めなければ、これが満たされようとは思われない。

「そのことをおれはずいぶん経験してきた。

しかしこの欠陥には補いがつく。吾々は超地上的なものを尊重する、

吾々は啓示に向かってあこがれる。

その啓示は、新約聖書の中でほど

尊く美しく燃えていることはない。」（1214～1219）（佐藤通次訳）

ここにゲーテ＝ファウストは瞭らかに新約聖書の啓示の独一性を評価している。啓示宗教として旧約と新約は一貫し、キリストを中心としていることは、イエス自身が

「聖書は我について証しするものなり」

といっているのを見ても瞭らかである。

啓示とは、超越界からこの相対的現実界への顕現であるから、それが霊的次元に属する事態であることは自明の理である。牧師や神学者がそのことを理解しながら、その事態を体験していない場合の多きをむしろ意外としなければならないのが当時も現今も、キリスト教界の一般である。ゲーテはむしろ霊的な事態に対してある種の感覚は有っていたと思われる。併し彼も真に旧約の預言者や新約の使徒たちの角度に於て、霊的現実の世界に突入しようとはしなかった。そこにゲーテの限界がある。少なくとも彼の宗教性の限界がある。

聖書が証言している現実は、正に神霊の啓示の事態であり、ヤﾊウェー（「実存者」たる神）がイスラエルに自らを啓示し、イエスに於てロゴス・キリストが受肉した驚くべき啓示の事態は、み霊に感じた魂でないとこれを身読することは出来ない。所謂聖書の研究からは、理解か又は感情的に受けとる程度のことが出来るにすぎない。啓示による体験の世界は、人間の主観的体験とはちがうことそここに明言して置かねばならない。

この相対界に絶対界からきり込んで来た啓示の事態、そこに光と闇の闘争、立体的ドラマの展開が必然なされる。これは傍観をゆるさぬ、魂に然りか否かを迫るの事態である。啓示の最もあざやかにして決定的なものは、いうまでもなくイエスの全生涯である。その降誕から十字架を経て復活し昇天するイエスの天地を貫く全生涯が即ち啓示中の啓示である。かかる高次元的現象に対しては、我らの持前の理性をも所謂宗教性をも乗り越えた受け方をしなければならない。その点でこのゲーテ＝ファウストが「啓示」をとりあつかっている述懐は正しい。

「は肉体となりて我らの中に宿り（幕屋を張り）給えり。我らその栄光を見たり。実に父のの栄光にしてととにて満てり」（ヨハネ1･14）

ところでうち開いたこのヨハネ伝第１章第１節、これを「神聖なる原典」から「好きなドイツ語」に訳してみたいといって翻訳を手がける。

［独文省略］

「こう書いてある。『に言があった！』。

ここでもうつかえる。誰が己を助けて先に往かせる？

私は「言」をそう高く評価するわけにゆかない。

私は別な具合に訳さないではいられない、

私がみ霊に正しく照らされているなら。」（1224～1228）（私訳）

「元始に言があった！」とルッターは訳している。ところが「ロゴス」を「言」と訳すことに既に不満と行きつまりを感ずるファウストである。「言」を過大評価するわけにゆかないという。「ロゴス」は「言」ではもの足りないと感ずる。ガイスト（Geist）によって光明を得るならば別な訳し方が与えられそうなものであるという。このは明らかに 聖霊、みと日本語に訳されるべきものである。み霊の智慧と力によって何とか適訳をしたいものであると思念する。それはコリント前書4･20に

「神の国は言にあらず、にあればなり」

とあり、また同書2･4､5にも

「わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、ととの証明によりたり」

等とある如く、は単なる言ではないことは確かである。それで「言」という訳では盛りきれない。

［独文省略］

「こう書いてある、『元始にがあった。』ペンがすべりすぎないように、第一行をよく考えよう！一切をり成すものが思念であるか。」（1229～1232）（私訳）

そこで「元始にがあった」と訳した。一切に作用し一切を創造するものが「思念」であろうかと自問する。「言」は「思念」「思想」の発露であろうが、「思念」「思想」「意思」といったものが元始であろうか。その様な意識界が一切の根源であろうか。さきにも触れたように、デカルトは

“ ”「我れ思う、故に我れあり」

といった。近代意識を代表する言として至言というべき命題ではある。併し意識する主体は意識の奥のなにものかであろう。ゲーテ＝ファウストがなお飽きたらぬ所以である。

［独文省略］「こうあるべきだ、『元始に力があった』！

しかし、こう書きおろしているうちに

もう何かが私に警告して、このままではだめだという。」（1233～1235）（私訳）

そこでこんどは「元始に力があった」と訳した。けれども「力」と書いてみているうちに、もう、そこに留まるわけにゆかない何ものかの警告を感ずる。言─思念─力と三段に移って来た動きを見ていると、観念的なものから実存的なものへと移行しているのを感ずる。而もまた意思、思念の発現したものが言であるとすれば、力が発現するとき、そこに何が生ずるかとも考えられる。ファウストのこころの動きはむしろそんな角度ではあるまいか。果然次の如く叫ぶ。

［独文省略］

「み霊の助けだ！　突如の霊告だ、安んじてこう書く、『元始に業があった！』」（1236～1237）（私訳）

み霊が啓示してくれた、助けてくれたという。そこでファウストはついに安んじて書く、「元始に業があった！」と。 ! 、、行為、わざ、何たる霊感ぞ。思念の現象態が言であり、力の現象態が業である。併し同じ現象態であっても言よりも業の方がより強き現象態である。そして実存態の最も端的にして顕然たるものは業、行為である。してみると思念と力が渾然一体となって発現するところに言があり、行為がある。思念が観念でなく実存的であるためには力がそこにらねばならぬ。それが真に発現すれば、その言は空言でなく、実言であり、実言が発動する世界は即ち業の世界である。

「神『光あれ！』と言い給いければ光ありき」（創世記1･3）

は正にそのような発動の、「言」と「業」とが相即して寸分のずれのない境地、「」「」一如の世界である。即ち「行」がそれ自体「言」の極みであり、行こそは最も烈しい言、表現なのである。「雄弁は銀にして、沈黙は金なり」との諺も、雄弁の極まるところ、即ち絶言の境地が沈黙であり、この沈黙は行為と相即したものでなければならない。業、行、行為、わざこそは実存の実存たる確証である。木の葉が揺れるので風の実在が証しせられる。風の実在性は木の葉を揺がす動的現象に於て知られる。その様に「業」あってこそ「業」の主体の実存性は確証される。神の実在は神の実存態によって証せられる。神の実存態はいずこにあらわれたか。

「光があった」

という「業」に於て、

「元始に神天地を創造し給えり」（創世記1･1）

という創造の「業」に於て。ヤﾊウェー（実存者）としてイスラエルの歴史に自現したという「業」に於て。即ちモーセにホレブ山上で自現した神は、

「我は汝の父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」（出エジプト3･6）

と宣言した歴史の神、実に歴史をして歴史たらしめる神、時をして時たらしめる神、場所をして場所たらしめる神、正に啓示神であった。永遠者なるが故に、元始をして有らしめ、終末をして来らしめる実存の神、その様な神なればこそ、自らをヤﾊウェー「実存者」と呼び、自らは

「我は在りて在らしむる者」

これが「我在り」の根本義。この「我在り」という者が汝モーセを遣わすのだ（出エジプト3･14～15参照）と宣うている（第三書房『ドイツ語』１９５４年５月、６月拙稿「モーセの召命」参照）。その様な啓示神の自現が「業」の最たるものであり、「元始に業があった」は正に神自らの言即業（行）の「わざ」があったのである。業こそは表現中の表現として人間の魂を最も強く深く感動せしめる根源的なものを有つ。それ故に業より烈しい言はないのである。実存の神そのものには、言─思─力─行が渾然一如の相を以て内在している。そしてそれが最も実体的であるところの相は業である。かくてまことに、

“ !”

「に業があった！」

は至言といわざるを得ない。ゲーテ＝ファウストが業に於て実存の根源相を見たことは、また全ファウスト劇のを示していることは、彼の告白小説「ウィルヘルム・マイスター」がこの「業」への道を語っているのとひとしい。「業」はかくて根源衝動としてゲーテ＝ファウストにとって宗教的な性格を有っている。宗教的性格の「業」は即ち、創造的であると共に人類社会に貢献し、これを救済する角度の「業」である。

「業」と訳して平安を得たファウストは、以上の如き構造に於て、「業」の訳語に於て同時に、言─思─力をも包摂せしめたと見るべきである。

イエスの福音を見るに、イエスは「汝らえよ」とは命じなかった。天国に入る資格は何によって決せられるかといえば

「ただ天にす我が父の御意を行う者のみ、之（天国）に入るべし」（マタイ7･21）

とある。

「凡て我がこれらの言を聞きて行う者を、の上に家を建てたるき人にえん」（マタイ7･24）

といっている。

また世の終末に、神が万民を集めて、羊と山羊とを分かつ如く、神の民と然らざる者とを分かつとき、その規準となるものは、所謂「信仰」でも、「神学」でも、「聖書学」でもなく、また「何を考えたか」でも、どんな「著作をなしたか」でもなく、それは正に、いかなる心ばせで生きたか。いかに愛を行じたかであるといった意味で、しているイエスの言に注目しなければならない（マタイ25･31～46参照）。即ち、

「王こたえていわん、『まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此らのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我になしたるなり』と。」

という言に於ける「王」はキリストを指すわけであるが、神の愛の体現者、行者キリストは、万人を兄弟として生きたし、今も天界からその如く見なして居る。具体的にキリストを愛し、神を愛するとは、同時に具体的に我らの隣人（その人が具体的環境に於て出合う一切の人）をかの「善きサマリヤ人」の如く愛することであり、その様な愛の行為、愛の実存が、その人の神の民であるか否かを実証する。いかなる宗教を信ずるか、否かも、そこでは問題でない。一個の人間が愛の実存たらんとして努力していたか否かに窮極的な問題はかかってくる。

「然らば、凡て人にられんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。」（マタイ7･12）

［独文省略］

愛の行為を受けたく欲う人間である。その根本的な欲求を、そのまま他人に向かって全的に傾けそそげ、とイエスは命ずる。「律法なり、預言者なり」という語は旧約宗教の全体であるとの意である。即ち旧約の根本精神はこの一語に要約していわれ得るのだとの意である。神はかくの如き愛の行者であり、キリストはその神に全我を投入することによってその様な「行」者となって生涯を貫き、今も天界から、その様な愛の根源力として臨んでくる。それゆえに、「元始に業（行）があった」との訳に於て、この「業」の内容は正に「愛」である。神の創造の「業」は愛の発現にほかならなかった。かかる「行」であれば、

「今まし、昔在まし、後来たり給う主なる全能の神」（黙示1･8）

の如く、

［独文省略］

「中に業がある。

終末にも業がくる。」

ということは必然、

“ !”（に業があった！）

の句自体が有つ内実から帰納されてくる響きとして不言不語のうちに聞きとられるべきであろう。ヒルティがその「人生の諸段階」（“Die Stufen des Lebens”）とう論説の終りのところで

［独文省略］「しかそこの場合、家族の者にかこまれて、同郷人のあまねき称讃を浴びながら人生を終ること、いわゆる美しい死ということが最上の運命なのでは決してない、また神の最高の称讃を意味するものでもない。ではなくて、それが国民または人類のための最後の行為であるような死をこそ、神はよみし給うのである。」（斎藤栄治訳）

といっているのそこの様な消息である。キリストの十字架は贖罪死として独一の愛のであった。

かくてゲーテ＝ファウストが1210～1237行に於て告白している事態を要約すれば、「最善の意志にも拘らず」性来の自己に欠如しているものは、啓示の世界、超越界のみが与え得るあるものであった。それは実に天来の「言」であり、天来の「思念」であり、天来の「力」であり、天来の「業」であった。ロゴスを大胆にも「業」と断じたところに、神の実存態を直観したゲーテ＝ファウストの素晴らしさがあり、「業」は正にファウスト劇全曲の始であり、中であり、終りであることの秘語としてここに語られたと見ることが出来る。大胆にいうことをゆるされるならば、ゲーテはここに於て観念的プロテスタント及び形式的カトリックに対して、行的な原始福音への復帰を無意識に指示しているといえよう。

［独文省略］「人間の活動はともすればみがちになる、人は得てして無制限に休息したがるものだ。」（340～341）（佐藤通次訳）

と「天上の序曲」でいっている神は、「活動」「行為」の源泉であればこそである。また神の「活動」は疲れを如らないのに、人間の活動はとかく停止、休息を欲する。も真の意味の休息、安息というものは神の与える恩恵の境地（ヘブル書4･9～11）ではあるが、それはここには問題とされていない。ひるみ勝ちな人間の活動、行為ではだめである。それは内面に天来の、啓示的な角度からの空言ならざる実言、観念にあらざる霊想、人力にあらざる神力、利己的な業にあらざる聖業。ヨハネ第１章第１節の第一句をゲーテ＝ファウストがかくも重視した意味の背後をさぐれば以上の様な消息が聖書の角度からは迫ってくるのである。而も大切な一事はファウストそこの翻訳をなすにあたって、天来の光をガイスト（み霊）から受けた（1228行及び1236行）ということである。ガイストこそは、啓示宗教に於て人間に入り来って、絶対界の扉を開き、絶対界と相対界を結んでくれる鍵であり、媒介者である。

ここにゲーテ＝ファウストがの導きによった消息を語っていることはその意味で極めて重要な事態である。聖書は

「人々聖霊に動かされ、神によりて語れるものなり」（ペテロ後書2･21）

とある如く、み霊の導きによって、書かしめられたものである。

、「人間の最善の意志を以てしても」（1210）どうにもならぬ我に絶我し、「聖霊の光」（1229）にうたれて天来の「言」「念」「力」三者一如の「元始の業（行）」（1237）に没我投入すれば、まことの「業」の人となる、といった消息こそこのゲーテ＝ファウストの言外行間の真理であろう。

さて以上の様に啓示宗教に対して一応正しい認識の角度をとったゲーテ＝ファウストは、「マルテの庭園」の場でマルガレーテとの対話に於て、宗教に対していかなる告白をしたか、それをここに検討してみなければならない。マルガレーテは教会の伝統を素直に受けとって、教会の現実に対して何の批判も有たない善良な一信徒としての役割を果している。作者ゲーテはその様に描き出している。これに対立して表明されているファウストの言葉は、正にゲーテその人の宗教観を吐露していると見てさしつかえないほどに端的に告白されてある。

“Glaubst du an Gott?”

「あなた、神さまを信じていらっしゃる？」

というマルガレーテの問に対して

“Mein Liebchen, wer darf sagen : Ich glaub‘ an Gott?”

「いいかい、お前、いったいだれが、おれは神を信ずる！などと言えよう」

と応えているファウストの真意は那辺にあろうか。ファウストは的な「信仰告白」、即ち信条信仰に対して、即ちその観念的性格に対して批判せんと欲していると思われる。神やキリストの生命の事態を、概念規定をしてそれを信じこんでみたところで、それがいのちの世界だろうか、それが神との深い交りの世界だろうか。或はサクラメントのことにしても（3423）、それを形式的にやってみたところで、それがいのちの宗教だろうか。サクラメント（プロテスタントに於ては洗礼と聖餐）は「尊敬はする」（3424）、しかし現実の教会のサクラメントに列しようとは思わない、といった気持が言外にほのめかされてある。ゲーテの重んずるのは、宗教の世界も、否宗教の世界なればこそいよいよ以て生命が大切なのであって、内的生命なき宗教はどんなにそれが形式的に立派であっても、信条的に厳密であっても、それは宗教そのものではない。否、それが宗教的なものであるというなら宗教には反しよう。信仰の事態はそんなものではないはずだ、という様な心根がファウストの応答の言外に響いている。キリスト・イエスは当時のユダヤ教に対して、その特に「偽善なる教法学者、パリサイ」に対して攻撃の矢を鋭く放った。マタイ伝第23章はその有名な

「なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ」

の七度の波状攻撃である。

［独文省略］ 「たとい司祭か賢人にいてみたところで、かれらの返事は、問うた人を

するものとしか思われんよ」（3428～3430）（佐藤通次訳）

などといっている言葉は当時の牧師や神学者に対する攻撃と思われる。教会の会員名簿や報告書の数量にたるり方や、おのれは真に回心の経験を有たず、聖霊の内住の消息も知らずして聖書の知識と形式の祈祷書でことをすませている様なのがとかく陥り易い宗教の堕落であることを見ているゲーテが教会信仰の事態に反対の立場に立つのは当然である。キリストは当時のパリサイの徒輩に真向から、

「なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは人の前に天国をして、自ら入らず、入らんとする人の入るをも許さぬなり。禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗音を得んためにを経めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子となすなり」（マタイ23･12～15）

云々と激越な語調で攻撃をし、

「よ、のよ」（マタイ23･33）

とまで極言している。

メフィストフェレスが「街路」でファウストと会話した言の中に次の様なのがあるが、これはファウストがここでマルガレーテにいわんとしている気持の補足をなすものとして援用することが出来る。

［独文省略］

「神について、世界とかその中で動くものについて、

人間とかその頭や胸に動くものについて、

いろんな定義を、しかも大へんな熱をこめて、

いけ図々しく、意気揚々と下したことはないのですかい？

そしてあなたが内心ふかく省みて、

それらについて、どうです、正直に白状なさい！

シュヴェートライン氏の死についてくらいお知りでしたかい？」（3043～3049）（佐藤通次訳）

即ち神とか、世界とか、その中の万象、人間とか、その人間の知、情、意の機能といったもの、その様なものに定義（Definitionen）を下しているが、「しかもたる顔付きで、大胆に胸を張って」やっているが、それらの知識は、シュウェルトライン氏の死に関する知識が曖昧であるほど曖昧ではないかと、メフィストがからかっているわけであるが、その中にはまことにゲーテ自身のいわんとしている真理がふくまれている。

生命の真相、実態は「定義」してみたところで、定義がいのちを与えてはくれない。定義それ自体を悪いというわけではないが、定義、信条、祭儀、といったことを宗教の本質と切り替えをやっているのが大錯覚である、といわんと欲しているのが3431～3458行のファウストの告白の中にあきらかに読める。

［独文省略］

「一切を抱く者、一切を保つ者、

彼が抱き、保っているではないか、

おまえをも、私をも、彼自身をも。」（3438～3441）（私訳）

パウロはキリストを指してこういった、

「彼は見得べからざる神のにして、の造られし物の先に生まれ給える者なり。万物は彼によって造らる。天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、或は位、或いは支配、或いは政治、或いは権威、みな彼によって造られ、彼のために造られたればなり。彼は万物より先にあり、万物は彼によって保つことを得るなり。」（コロサイ1･15～17）

また神とキリストについて、

「我らには父なる唯一の神あるのみ、万物これより出で、我らも亦これに帰す。また唯一の主イエス・キリストあるのみ、万物彼れに由り、我らも亦彼に由れり」（コリント前書8･6）

また曰く、

「神が万象に於て万象となり給わんためなり」（コリント前書15･28）

その媒介たるはキリストであると同節でいう。また曰く、

「凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に帰すればなり。栄光とこしえに神にあれ、アーメン」（ロマ書11･36）

また曰く、

「かくてギリシャ人とユダヤ人、割礼と無割礼、あるいは、スクテヤ人、奴隷、自主の別あることなし。それキリストはのものなり。万のものの中に在り」（コロサイ3･11）（更にエペソ4･3～6参照）

この様なパウロの証言は神─キリスト─聖霊─万物を貫く驚くべくも太き一線である。一如、一体、遍満、遍在、遍照の消息で、

「くあり」

といった調子と相照応し、それよりも強度のものである。ゲーテに於てはキリストがその様な高次の霊的現実存としては受けとられていないが、神─太陽─万有といった線に於てゲーテは一如を感得している。

「万有を抱き、万象を支え、おまえをもわたしをも、おのれ自身をも抱き、且つ支えている」

者として神を表現したゲーテは、「抱く」とか「支える」とかいう語に於て表わしているように、神を具体的な実在者として体感している。ゲーテに於て宗教の大切な一事はこの体感の事態である。

［独文省略］

「わたしとお前が目と目で見入っていると、

あらゆるものがお前のあたまへと

お前の心へと迫ってきて、

永遠の秘密のうちにお前の身辺に隠れつ見えつ漂うているではないか。」（3446～3450）（私訳）［独文省略］

「それをお前の胸一杯に満たしなさい。それで情感極まって至福を覚えたら、それを何とでも好きなように名ざすがいい、

幸福よ！　心情よ！　愛よ！　神よ！　と。わたしはそれを名づけようがない！

体感が一切だ。

名は天焔のめぐりに

漂うひびきか煙か。」（3451～3458）（私訳）

これらの詩句の前に、大空と大地と星辰が神の抱擁と支持の中にあることを同じく語り、おまえマルガレーテと私ファウストの共感共鳴、以心伝心の「永遠の神秘」を何と解明するとも、解明が現実ではない、

「名称は天焔（太陽の如き存在）──ひいては霊神を指している──の響か煙のようなものだ」

といい、

「体感（情感）こそはすべてである」

と喝破した。その内容を、「幸福」とも「心情」とも「愛」とも「神」とも呼ぶにまかせる、というのである。かくてゲーテ＝ファウストの宗教は、勿論観念的な、「観」的なものではなく、信仰箇条や礼拝様式を問題とする宗派的なものでもなく、正に体感宗教とでも申したきものである。その点では、シュライエルマッヘルが「絶対帰依の情感」（Schlechthiniges Abhängigkeitsgefühl）に宗教の本質を見たのと一脈相通ずるものである。ただシュライエルマッヘルのは勿論対象を明確に意識しての「絶対帰依の情感」であるが、ゲーテ＝ファウストのそれはこのファウスト第一部に於けるこの告白に於ては対象はつかみ得ないある神秘的なものであって、それを現象界の一切に於て体感するよりほかないというのである。それは釈迦も「八万四千の法を説いたが一語も説かなかった」というのと同じく、名称、説明はついに本質本体そのものではない。本質本体は全実存を以て体感されねばならないというのである。

啓示宗教に於ても、神そのものは、啓示がない限り絶対に不可知不可測である。否実に啓示があっても、パウロが嘆じて告白するように

「ああ神の智慧と知識との富みは深いかな、その審判は測り難く、その途は尋ね難し、『たれか主の心を知りし、誰かそのとなりし、たれか先ず主に与えて其の報いを受けんや』（ロマ書11･33～35）

である。併し聖書で明確なる一事は、その不可知不可測の神が、イエス・キリストに於て自顕したということである。旧約及び新約の啓示は悉くキリストを中心太陽として回転しているようなものである。イエスは単に宗教の大天才というのではない。神の

「満ち充てる神性がことごとくをなしてキリストに宿った」（コロサイ2･9）

のである。イエス自身が

「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ14･9）

といった。当時の正統派ユダヤ教徒には此の如きイエスの言はの言として彼が十字架につけられる伏線をなすものとなった。福音の消息に於ては神と万有の間にキリストを抜くわけにはゆかない。キリストなくして救いはないからである。併しゲーテ＝ファウストの宗教観に於てはキリストはその様な重要性を有たない。復活のキリストの歌もただ少年時代の宗教の世界の瞬間的な想起として光を一瞬役じたにすぎなかった。勿論その一瞬は毒杯を思い止まらせるだけの重要な一瞬ではあったが。そこでは復活という宗教的感情が彼を救ったので、キリストの復活のいのちそのものが彼を救ったのではない。キリストという啓示の主体が決定的重要性を有たず、否むしろ避けられているゲーテ＝ファウストの宗教性は、正に体感宗教であり、自然神的宗教であることはあらそえぬ事実である。神─太陽─自然─我といった系列である。併し、そこに生命が躍動しているところに彼の体感の強みがある。併しまたそこにキリストという神格を具現した啓示の主体が欠如しているところに、神格的、霊格的要素の欠如、聖霊の明確なる信受や祈りの生活の欠如がわれている。

明確なる啓示宗教は所謂主観的体験宗教とは異なる。啓示宗教を真に受けとるためには、預言者や使徒たちと同質的に聖霊を体験しなければならない。それは単なる“ ”（体感が一切だ）ではない。むしろ . .（聖霊が一切だ。私は無だ）と申したい。人間の理性、悟性、感性といった面ではなく霊性が新たに聖なる霊界に目をさまされ、この聖なる霊界を呼吸する限りに於ての全存在的体験というなら体験である。絶対次元的なものを新たに霊感する消息である。そのとき、神─キリスト（霊的具体性に於て永遠に実存する）─聖霊─万有、のつらぬきがここに成りたつ。それはさきに引用した一連のパウロ聖句が示す如くである。そのとき野辺の一輪の花にも、路傍の一石にも、空ゆくの翼にも、神愛を感得し、神智を知り、神意を聴くことが出来る。「永遠の神秘」がその様な霊的な角度に於て体感されるのが聖書の啓示の世界で、十字架のキリストという狭き霊の門をくぐると、そのさきは無限に広い聖霊の霊気の世界で、

「聖霊はすべてのことを究め、神の深きところまで究む」（コリント前書2･10）

とパウロが申す如く、無限に究めゆくことのゆるされる世界である。

さりながらファウストが、

［独文省略］

「それはあらゆる場所であらゆる心の人が天日の

銘々の持前の言葉で言うのだ、

私が私の言葉で言えないわけはあるまい。』（3462～3465）（私訳）

といっている様に、どこまでも仮りものでなく、「自分の言葉で」「私流の言葉で」語るに何の妨げあらんというところに、彼の天真さがある。男一匹、裸一貫、

「体感が一切だ」

「元始にがあった」

と喝破するところに彼の宗教があった。かかる気魄は、「父よ！」といって全身を投じつくしたキリスト・イエスの棄身の実存には距離があるけれども、観念的な形式的な信仰よりも遙かに神の国に近い実存態である。

併しながら、天来の明智が欠け、聖霊による浄化がなされず、十字架の贖罪の恩寵を受けとる魂の死生の転回の消息を受けぬファウストがメフィストの誘惑のにって、愛が天的なものに変質、転向、転換をなさぬ限り、人性の最も美しき「愛」が人生を最も悲しき淵へと追いこむ。それがいうまでもなく、第一部のグレートヘン悲劇である。

［独文省略］

「君のようなにはわからんのだ、

どんなにこの信実な愛すべき魂が、

その信仰に満ちて、

全く祝福されていながら、最愛の男が失われたと思って、聖い心でなやんでいるかは。」（3528～3533）（私訳）

といってファウストはグレートヘンのな魂の信仰と愛を貴びつつも、自らはメフィストの術中に陥ってゆく。

［独文省略］

「色気を超越した色餓鬼さん、そんなつもりで

言い寄ると、小娘に手玉に取られますぜ。」（3534～3535）（佐藤通次訳）

というメフィストの言は「二つの魂」をもつファウストの実相を看破して遺憾なき名言であると同時に、ゲーテその人の生涯を通しての宿命的な消息を告白している。女性はファウストをまどわしつつ（nasführen）、またのぼらしてゆく（hinanziehen）という下向と上昇の作用を起こさせる風の如き存在である。ゲーテ＝ファウストは女性という奇しき風に乗って或は上昇し、或は吹きおとされる鷲の如くである。彼の中にある超官能的なものと官能的なものとが女性という風によって動揺しつつ進んでゆく。この風がなければしかし空高く舞い昇ることの出来ない鷲である。鷲は大自然を友とし、太陽を目指して昇ってゆく。神─太陽─自然─女性といった一連がファウストという鷲には不可離のものとして宗教的な構造を成す諸要素である。

グレートヘンはファウストの霊性の目ざめの欠如した「体感一切」の宗教性のもろさの犠牲となる。メフィストはファウストのもろさを知る悪霊であった。ファウストはこれに太刀うち出来なかった。

「悪魔のに向かいて立ち得んために、神の武具をもてうべし。……この世のをどるもの、天の処にある悪の霊と戦うなり。この故に神の武具をとれ。……御霊の、即ち神のをれ」（エペソ6･11～17）

即ち悪霊に勝つためには、聖霊との交りを有たねばならない。聖霊は神の言の中にこもっている。霊と言とはここでも一如である。キリストの言はただちにであったから、あの様に実力を発揮した。ルッターの“ ”の讃美歌の中の“ () .”（小さな〔聖〕言がサタン倒すことができる）とは正にその様な霊言の実力である。その意味で、啓示に於て名は決して「煙」でも「響」でもなく、［名］は直ちに「実」で、呼べば応える神の世界である。祈りの終りで「聖名によって」というのも、その実力のゆえである。併しそれらの事態が一般に空念仏的になっているので、メフィストに嘲けられ、されてもわからない霊盲であり、聖霊なき信仰（宗教）の無力さなのである。ファウストの敗北も実に聖霊の助けを受けなかったことによる。

［独文省略］

「人間の全苦痛をおれは身に覚える。」（4406）

「ああ、おれは生まれて来なければよかったのに！」（4596）（私訳）

とは悲痛な嘆息の声である。のに耐えかねた言葉である。併し彼は罪そのものを告白しない。悔改は竟に起こらない。

その様なファウストのため執り成しをなすグレートヘンの存在。ファウストに誘われて幾重の罪を犯し、投獄され、罪に泣き、神に謝罪し、一切を神の審判にゆだね奉り、死にゆくグレートヘンは、いわばファウストの罪をも負ってれる。いかなる人間も、人間の罪をうことは出来ない。併し犠牲となって死にゆく人の愛がむなしく消えてゆくのではない。

［独文省略］

「ハインリヒさん！　ハインリヒさん！」（4612）

の第一部結句の叫び声に、愛の執り成しがっている。唱名はこの場合単なる「煙」でもなく、「響き」でもない。ファウストの全存在を新生へと救いあげる力をもっている。限りなき余韻をふくんでいる。

“ -

 ”（12110～12111）

「永遠に女性なるもの我等を引きて往かしむ」（鷗外訳）

という第二部最後の句への予韻とでもいいたいところである。実に第一部と第二部の結句が相呼応している。この唱名がファウストの魂を深く谷底へ吹き落としたと共に、峰の上高く舞いあがらしめる愛の霊風の如くであったろう。ゲーテ＝ファウストはかくて第二部への推進力を与えられる。われて罪を犯し、悔い改め、神の審判に身をゆだねて仆れる瞬間までもファウストを愛しぬくグレートヘンの純なる愛は、死を越えてなおファウストのためりしをつづける永遠的な愛である。第二部の次の句がそれを語る、

“

 ”（11938～11939）

「そして彼には天上からの愛があずかって力あったのです。」（私訳）